

発電設備専門技術者 インタビュー ③②

村田 久也 さん（三愛物産株式会社）

港町として発展し、津城を中心とする城下町として栄えた三重県津市。三愛物産株式会社三重支店は、伊勢湾・阿漕浦（あこぎうら）の程近くにあり、同社に勤務する村田久也さん（65歳）は40年余り、この三重の地において自家用発電設備専門技術者として活躍されてきました。地域と仕事を愛して止まないという村田さんへ、インフラ施設に関わることの意義や災害時のエピソードなど、貴重なお話を頂戴しました。

地域に貢献したいとの想いで入社

三愛物産株式会社は上下水道や排水機の建設を得意とし、現在従業員88名を擁する専門工事会社です。同社の発祥は、三重県南部の熊野灘に面する尾鷲市。現在は本社を名古屋市に置き、東海地区を中心に業務の発展を遂げてきました。

村田さんは久居（ひさい）市（現：津市）の生まれ。県内の工業高等専門学校の電気工学科を卒業後、昭和49年に入社。入社の際の動機は、生まれ育った地元で仕事を通じ社会貢献したかったからだと言います。

希望通り津営業所に配属され、水道施設の保守業務からのスタート。非常用自家発電設備（以下：自家発）のほか、受変電設備、配電設備全般の修理点検を行うこととなります。程なくして専用の

営業車を与えられ、県内の現場をくまなく飛び回ることに。当時は高速道路も整備されておらず、南北約180kmもある県内各地を移動するには苦勞を要したと言います。

初工事は伊賀地方の浄水場のポンプ及び自家発の新設。300kVAのディーゼル機関でした。村田さんは、ポンプも含めた電源・制御装置の試運転調整を行い、無事完工させます。

当時の津営業所は20名弱。創業以来の主力であった船用機関の整備技術者も多く、測定機器と併せて五感を頼りに、正確な整備をされていた職人肌の上司もいたとのこと。「機械の調子を診断するのに、我々には想像もつかない閃（ひらめ）きを持つ先輩はいましたね。」と、村田さんは往時の現場の雰囲気を感じておられます。

昭和56年、自家用発電設備専門技術者資格を取得、30歳の時に技術課主任となり、上司の始動やメーカーの協力も仰ぎながら、村田さんは水道施設工事のスペシャリストとしてその技術力を開花させていきます。

電気と水の二つの生命線を支える

とはいえ、会社もまだ成長途上であり、施工後の自家発のメンテナンスも引き続き村田さんが担うこととなります。自家発の保守契約がまだ一般的ではなかった頃、水道施設の管理者がトラブルの際に真っ先に頼るべき先は、自ずと村田さんら設計施工の第一線で従事していた三愛物産のスタッフでした。

元号が平成に替わる前年の昭和63年の出来事。阪市内の排水機場が台風・落雷により停電、しかしながら自家発が始動しないとの連絡が深夜、村田さんの元へ入ります。大雨の中、独り車を走らせ現地到着し調査の結果、始動用バッテリーの充電回路のヒューズが飛び、放電していたことが判明。急ぎ充電し自家発を稼働させました。

水道施設の停電により、水の安定供給に支障が

出かねない、そんなプレッシャーを背負ってのトラブル対応。「当社の場合、電気と水の二つの生命線を背負っていることを痛感します。」と、村田さんは自身の職責の重さを噛み締めながら話します。悪天候の中での現場への道すがらで、危険な思いをしたこともあったと村田さんは顧みつつ、公共施設に携わる「民」の技術者として、現場主義の重要性を次のように説きます。

「我々は技術者だけど、一方で保守整備はサービス業。お客さんの苦情を聞き出し、逆に日常点検の大切さを説いて回るのも、当社のような地域密着の会社では欠かせない業務の一つだと思います。」

知り尽くした風土での確実な施工

平成11年、技術者として脂が乗り切った村田さん48歳の時、三重県志摩地方の送水場のポンプ2基及び自家発（ディーゼル機関駆動200kVA×1基）更新工事の監理技術者として、現場へ常駐することになります。沿岸が起伏に富む英虞湾南側に位置する送水場。過去村田さんも何度も仕事で足を運び知り尽くした地。資機材の運搬ルートも限られ作業工程にも支障が出かねない中、既設の送水設備を活かしながら、基礎工事も含め予定通り9ヶ月の工期内に納め、監督として文字通り水際立った采配を振るいました。



設備引渡し前の最終点検を行う村田さん

平成23年、尾鷲市の浄水場の自家発更新工事。年間降水量が日本一と言われる同市では、豪雨による河川の氾濫など、かつては水害も多かった地域です。平成16年の台風21号では多くの被災者を出し、村田さんも復旧対応に駆け付けた場所。設備の更新理由は、津波対策のための浄水場の高台移転に伴うものでした。配水ポンプ3基、送水ポンプ2基とガスタービン発電設備（500kVA×1基）の工期は約2年半に渡る長丁場。村田さんは

工期途中で支店長職となりましたが、その後も時間の許す限り現場へ赴き、途中台風による工事中断もあった中、与えられた工期にて完了しました。



浄水場の自家発（500kVA×1基）

村田さんが県内で携わった上水ポンプと自家発は50件以上。災害に強い水道として、大部分が今も住民の大切な生活基盤として活躍しています。

伊勢湾台風を経験して

平成23年に東日本大震災が発生したのに続き、平成28年に熊本地震が起きるなど、依然として日本列島を覆う大災害が後を絶ちません。

村田さんも昭和34年9月、7歳の時、死者、行方不明者を合わせて5,000人以上を記録した伊勢湾台風に遭遇しました。久居市に住んでいた村田さんの実家前の道路も、側溝から濁流が溢れ出し川と区別が付かなくなるほどに。当時は指定避難所も未整備であり、小学校2年生だった村田さんは停電となった実家の押入で、夜通し台風が過ぎ去るのを、耳を塞ぎ震えながら待ち続けたそうです。

現在、紀伊半島沖では近い将来に東南海地震の発生が懸念されています。村田さんは、災害の怖さを知るが故に、自家発の重要性を社内外で説き続けてきました。ポンプの施工にしても自家発の施工にしても、日頃決して脚光を浴びる仕事ではないと村田さんは憚（はばか）りつつ、最後にこう言い表しました。「でもいざという時には人の命を預かるのが自家発。我々地域の『守り神』の存在だと思っています。」